様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３１３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０３１４１

研究課題名（和文）ジューンガルの崩壊過程からみた遊牧国家の構造とオアシス定住民

研究課題名（英文）Oasis dwellers in the Structure of Nomad Nation: The Case of Junghars in the Process of Collapse

研究代表者
小沼　孝博（ONUMA, Takahiro）

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：３０５０９３７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、18世紀中葉における遊牧国家ジューンガルの滅亡を、清朝による「征服」という結果ではなく、「崩壊」という内部の過程を重視して再検討するものであった。具体的な成果としては、遊牧国家を「多様な集団の連合体」と理解する前提のもと、特にジューンガル政権とオアシス出身者の関係を交通や交易に注目して明らかにし、それらの清朝征服後における変化を追究した。また、本研究に関連する史料や史料用語を検証し、文献学的な検討もおこなった。本研究により、遊牧国家の消滅をともなった18世紀中葉の天山山脈南北一帯（中央アジア東部）の社会像の変遷を、断絶させずに、トータルに把握することが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で扱った事象は、一遊牧国家の消滅、或いは一地域の征服という範疇にとどまるものではなく、世界史上で重要な役割を果たしてきた遊牧国家が消滅し、拡大を続ける大陸帝国（清やロシア）によって中央アジア世界が併呑・分断されていく転機の一コマである。本研究は、世界史的な構造変動のプロセスを、内側からつぶさに観察し、具体的に提示するという目的を兼ねており、その成果の一部を英語・中国語でも公開し、また学生・一般読者向けの図書（分担執筆）に反映できた点は、大きな学術的・社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This research project reexamines the fall of the Junghar nomad empire in the middle of the 18th century, not as the result of the conquest by the Qing dynasty, focusing on the internal process of collapse. As research result, based on the premise to understand nomad empire as a confederation of various groups, I clarified the relationship between the Junghar regime and the oasis dwellers, focusing on traffic and trade systems, and traced the changes of the respective elements after the Qing conquest. In addition, I examined the historical materials and terms related to this research, and conducted philological examinations. Through this research, it has become possible to comprehensively grasp the changes in the social conditions of areas around the Tianshan Mountains (eastern Central Asia) in the middle of the 18th century even though the disappearance of nomad empire occurred in this period.

研究分野：内陸アジア史、中央アジア史、新疆地域研究

キーワード：ジューンガル　遊牧国家　交易　交通　オアシス　遊牧民　定住民　新疆

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

中央ユーラシア・中央アジア世界の歴史展開を理解するにあたって重要な視点の一つとなるのが、北部草原に拠る遊牧民と南部オアシスに居住する定住民との対立・共存の関係である。前近代において軍事に優る遊牧民は、時として強大かつ広域な遊牧国家を建設し、周辺世界に大きな影響を及ぼしてきた。これに対して、オアシスに集住して農業・商業・手工業を生業とする定住民は、遊牧民に恒常的に支配される立場にあったが、一方で遊牧民が持たない安定した経済力や先進的文化を提供し、遊牧国家の経済的基盤を支える役割を果たした。中央アジアに誕生した強力な国家は、遊牧民の軍事力とオアシス定住民の経済力という二つの要素を両輪とし、その巧みな結合の上に成立した。

17 世紀後半、天山山脈の北側に広がる中央アジアの草原地帯でオイラト諸部族が連合して成立した遊牧国家ジューンガルも例外ではない。1680 年にジューンガルは天山山脈の南部オアシス地域（東トルキスタン）を征服し、その地で農業・商業・手工業を営むテュルク系ムスリム定住民（現在のウイグル族）を支配下に収めた。その後ジューンガルは一気に強大化するが、その要因の一つに、ジューンガルの保護と組織化により東トルキスタン出身のムスリム商人の交易活動が飛躍的に発展し、大きな経済的利益を獲得したことを指摘できる。ところが、1745 年に継承争いに端を発する内紛が生じると、ジューンガルの政権中枢の求心力は著しく低下し、1755 年には清朝の遠征軍によって打倒され、さらに属領であった東トルキスタンも 1759 年に制圧されるに至る。以後、周辺へ大きな影響を及ぼす遊牧国家が世界史上から姿を消した事実に鑑みれば、ジューンガルの崩壊は、単なる一遊牧国家の滅亡にとどまるものではなく、遊牧民・遊牧社会が独自の地位を失った世界史的な転機と位置づけられる。

以上の評価も相俟って、ジューンガルの崩壊に関する研究は、清朝による征服という結果を重視してきた。一方、1745 年以降の混乱により政権からの離脱者が増え、清朝征服前にジューンガルが内部崩壊をきたしていた事実は、認知されていても、オイラト側の史料の絶対的な不足もあり研究は手薄である。これまで応募者は、中央アジア草原の地域像が清朝による征服と支配を経験する中でいかに変容し、「辺境」として位置づけ直されていったか、という課題に取り組んできた。そしてその過程において、東トルキスタンのムスリム住民が残したテュルク語やペルシア語の歴史叙述、及び清朝の満洲語文書に、崩壊期ジューンガルの政情や政権中枢と紐帯をもつムスリム有力者の言動に関する記録が豊富に含まれており、従来の史料状況を大きく改善できることを認識するようになった。遊牧国家とは、単に「遊牧民の国家」ではなく、「遊牧民が主体をなす多様な集団の連合体」である。さすれば、ジューンガルの崩壊期に生じた諸問題、例えばその局面で東トルキスタンのムスリム有力者がどのような行動をとったのか、或いはジューンガル政権側はそれにいかに対処したのかといった問題を、上記史料を活用して解明することは、それぞれの行動の目的や原理の把握のみならず、中央アジア史上における遊牧民とオアシス定住民の「巧みな結合」の具体像を炙り出すことになると考えるに至ったのである。

２．研究の目的

本研究は、対象地域を中央アジア東部に位置する天山山脈の南北一帯（現在の中国新疆に相当）とし、時代は 18 世紀前半から中葉、より具体的にはジューンガルの内紛が発生する 1745 年から、1755 年のジューンガル崩壊をはさみ、清朝が東トルキスタンを征服してベグ官人制という統治制度を施行する 1760 年までとする。以下、本研究で設定する三つの具体的課題について記す。

課題(1) ダワチによる政権簒奪の再検討

1745 年にジューンガルの全盛期の君主ガルダンツェリンが没すると、彼の 3 人の息子をそれぞれ推すタイジ（部族長、王侯）の抗争が先鋭化し、最終的に 1753 年、君主としては傍系のダワチが政権を簒奪するに至る。先行研究では、このダワチの奪権がさらなる混乱を呼び、清朝の征服を招く原因となったとされ、滅亡を導いた張本人と論断されている。しかし、奪権後の彼の実際の行動に関しては、ほとんど何も検証されていない。ダワチがとった強権的な行動には、傍系ゆえに各部タイジやムスリム有力者と関係が希薄であったろう彼なりの政権構想が反映されていたはずである。ダワチによる政権簒奪を再検討し、彼の政治目標や行動原理を明らかにすることで、遊牧国家の支配者にとって必要であった要素・条件を照射する。

課題(2) 遊牧国家におけるオアシス出身有力者の位相

ジューンガルの混乱が深まるにしたがい、東トルキスタンのムスリム定住民にも自立的な行動が目立つようになる。その中で、ウシュのハーキム（行政官）であったホージャ・シーは、ムスリム史料と清朝史料の双方から事績を追える数少ない人物である。彼は当初、ジューンガルと良好な関係を築いていたが、ダワチが政権を簒奪し、清朝の征服活動が進展するに及び、現地社会でヘゲモニーを握るべく複雑な動きをみせた。本研究では、彼の言動や権力の所在を探ること

で、遊牧国家におけるオアシス出身有力者の位相や利害関係を明らかにする。また、1759 年に清朝が東トルキスタンを征服し、翌年にベグ官人制を導入すると、ホージャ・シーは北京に身柄を移された。彼のいかなる側面が清朝の統治体制と相容れなかったのかという点も考察の射程に収める。

課題(3) 遊牧民とオアシス定住民の関係を支えたシステムやツール

上記二つの課題の前提となる遊牧民とオアシス遊牧民との人的関係が、果たして何によって下支えされ、維持されていたのかという点については、研究蓄積が極めて薄い状況である。ところが本研究で利用するムスリム史料には、断片的ながら、ムスリム有力者たちが招集されて天山以北のイリ地方へ赴き、ジューンガルの君主に対面する場面が描かれる。本研究では、場面構成や対話内容を分析し、その意義を明らかにする。また、天山山脈の南北を結ぶムザルト峠についても、清朝征服以降の状況も勘案しながら、両者の関係を支えた重要なツールとして注目したい。

３．研究の方法

本研究は、補足的な現地調査も実施するが、文献史料の読解に基づく歴史学研究の手法を基本とする。先行研究も手薄という現状をふまえ、特に海外の研究機関に所蔵される未刊行の一次史料（写本・文書）の調査・収集とその分析に力点を置く。調査を予定しているのは、①ウズベキスタン・タシケントのウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所（以下、東洋学研究所）、②ロシア･サンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋写本研究所（以下、東洋写本研究所）、③スウェーデン・ルンド大学図書館、④中国北京の中国第一歴史档案館（以下、第一档案館）である。①～③ではテュルク語・ペルシア語の写本史料を、④では清朝の公文書史料（档案）を調査する。

写本史料の所蔵機関のうち、③ルンド大学図書館は調査実施の経験を有しており、かつ当館所蔵 Jarring Collection に含まれる『ハミード史』、『ハーン・ホージャム伝』はウェブ上に画像が公開され、本研究でもこれを活用する。『勝利の記』を所蔵している①東洋学研究所は、過去に訪問の機会はないが、後述するように、すでに知人の研究者を通じて照会し、利用について承諾を得ている。②東洋写本研究所については、本研究で利用する所蔵史料である『ホージャ伝』、『イスラームの書』は、東京の公益財団法人東洋文庫に所蔵されるマイクロフィルムで閲覧可能である。特に『イスラームの書』は、ダワチの政権簒奪をイリ地方で目撃したムハンマド・アブドゥルアーリムの手によるテュルク語韻文叙事詩であり、本研究の課題遂行において重要な位置を占める。ただし、②のウェブ上の画像も同様だが、マイクロフィルムには不鮮明な部分があるので、その部分はそれぞれ現地を実際に訪れて確認することにする。

④北京の第一档案館では、「軍機処全宗」に分類されている満洲語の文書群（以下、軍機処文書）を調査する。清朝のジューンガル遠征の指揮をとった前線の司令官が清朝中央（皇帝、軍機処）に送付した奏摺（上奏文）は、中国第一歴史档案館編『清代新疆満文档案彙編』[280 冊、広西師範大学出版社、2012、以下『彙編』] として刊行され、すでに応募者の研究室に所蔵している。一方、この上奏案件に対する清朝中央の審議・採否・指示の内容を記す「満文上諭档」については、長らく整理中で閲覧できなかったが、デジタル化作業が終了して平成 28 年中に再公開されるという情報を館員より得ているので、第一档案館に赴いて調査・閲覧をおこなう。

以上のように、本研究の鍵となる未刊行の一次史料は分散して収蔵されており、言語も多様であるため、その読解にも相応の時間と労力が求められる。このため実施期間は最長の 5 年（※）とし、前半は史料の調査・読解という基礎作業に時間を充てる。

（※）申請・採択当初の研究期間は 5 年であったが、1 年延長し、実際は 6 年となった。

４．研究成果

(1) 海外における史料調査の成果

本研究は、文献史料の読解に基づく歴史学研究の手法を基本とし、特に先行研究が手薄である点をふまえ、写本・文書等の一次史料の調査・収集とその分析に力点を置くものであった。ただし、新型コロナウイルスの感染拡大とロシアのウクライナ侵攻により、当初史料調査を予定していた研究機関のうち、②③は実施できず、④も初年度（2017 年度）に極めて短期の調査を実施したのみで終わった。一方、本研究課題の経費に基づくものではないが、2018 年 9 月から 2019 年 3 月まで研修休暇を取得し、タシケントで在外研究に従事したため、①の東洋学研究所が所蔵する『勝利の書』、『ホージャ伝』、及びコーカンド・ハン国史料の『シャールフ史』の写本を調査し、関連情報を収集できた。また、④の代替措置として、最終年度（2023 年度）の 2 月に台湾を訪問し、国立故宮博物館図書文献館と中央研究員歴史語言研究所で清朝档案史料の調査を実施した。

(2) 現地フィールド調査

本研究では、補足的な現地フィールド調査を実施した。当初の計画では、中国新疆ウイグル自

治区イリ地区に赴き、天山山脈の北側からムザルト峠へ通ずるシャト古道上の史跡調査をおこなう予定であったが、現地情勢の急激な悪化によりこれを見送った。その代替措置として、2019年 8 月末から 9 月初頭にかけての約 1 週間、中国青海省に赴き、西寧～玉樹間の交通路の調査を実施した。このルートは、古来チベットへ通ずる重要な交易路として知られ、17～18 世紀にはジューンガルがチベットや清へ派遣した使節・隊商が通過し、その中には東トルキスタン出身のムスリムも含まれていた。西寧より、都市・集落・寺院・草原・峠・渡河地点を経由・調査しつつ、南北の移動で生じる地理・環境条件の変化を観察した。特に要衝となる峠や渡河地点には、オボーや仏塔が設置されており、移動と信仰の相関を具体的に把握できたことは、史料中の記載の理解に大いに裨益するものであった。

（3）研究成果の公表

研究成果の公表は、国内外の学会・研究会における研究報告と、学術論文の執筆という形態をとった。主な成果は以下の通りである。

第一に、16 世紀前半から 18 世紀前半にかけての天山山脈の南北一帯における遊牧民とオアシス定住民の関係を、都市と交易の発展に注目して検討した。まず、新興の遊牧ウズベク等によって南遷を強いられ、遊牧型国家からオアシス型国家へと変容していったモグール・ウルス（ヤルカンド・ハン国）について、東トルキスタンのオアシス都市やそこを拠点とする遠隔地交易との接点を炙り出し、モグールの君主（ハン）が、対外交易に関わる隊商派遣及び最重要の輸出品である玉石採掘の権利を掌握し、それらを商人に高額で売却することで利益を得ていたことを解明した。すなわち、隊商交易の収益とはオアシス国家の王権を支える重要な財政基盤だったのである。続いて、モグール・ウルスの南遷後、天山北方の草原地帯に成立した遊牧国家ジューンガルについて、その体制内に包摂されたオアシス出身のムスリム定住民との相関を探った。その結果、ジューンガル政権がオアシスの富を収奪する一方で、利益共有からジューンガル政権と結びつき、権勢の伸張や交易特権の獲得を果たしたオアシス出身者の存在を浮かび上がらせることができた（「遊牧民とオアシスの民、そして交易：モグール・ウルスからジューンガルへ」）。

第二に、同地域が 18 世紀中葉に清の統治下に組み込まれ、「帝国」の周縁に位置するようになった後の状況変化を追った。東トルキスタンのオアシス都市では清による対外交易の制限により、在地のムスリム商人の国際的な隊商交易は次第に不振となっていった。交易路上に人の出入を監視するカルンが設置され、その通過には清朝当局からの許可が必要になった。新疆北部での官営貿易が開始されると、カザフが東トルキスタン諸都市に交易に赴くこと、および東トルキスタン出身商人がカザフに対象を派遣することが禁じられた。清朝当局側に在地商人の積極的活用という経営戦略は欠如しており、次第に在地商人の自由な交易活動に対する制限を強めていったのである。ただし、清が対外交易を制限していくプロセスを細かに追っていくと、そこには別の側面が見えてきた。すなわち、清の征服に協力し、主要オアシス都市のハーキム・ベグ（行政長官）に任命されたムスリム有力者が、交易に関わる利権を掌握していく動きである。隊商を卡倫の外側へ派遣するには、まずハーキム・ベグから隊商編成と派遣の許可を得る必要があり、その後で清朝大臣による出卡の許可がなされた。各オアシスでの交易制限に関わる実務レベルの対処は、清朝大臣ではなくハーキム・ベグが担っており、清による制限貿易への志向は、ハーキム・ベグの座にある者にとって「貿易事務」を自らの掌中に握るという“うまみ”を持っていたことを解明した（Political Power and Caravan Merchants at the Oasis Towns in Central Asia: The Case of Altishahr in the 17th and 18th Centuries）。

第三に、天山山脈の中央部を縦貫するムザルト峠越えのルートを事例に、ポスト・モンゴル時代からジューンガルの時代における当地域の南北交通、及びそれによって結びつけられた北の遊牧社会と南のオアシス社会の相関を検討した。ムザルト峠は、険路で知られるも、隊商が往来する重要な通商路として利用されてきた。16 世紀の成立当初、草原地域の奪還を狙うヤルカンド・ハン国は、アクスを戦略上極めて重視していたが、それは東西ルートの「天山南路」上にあると同時に、ムザルト峠越えの南北ルートの南側の起点でもあり、二つのルートが交差する要衝に位置したからである。また、ジューンガルは、天山の南北両地域をウラ（グ）の徴発（＝人力・畜力の徴発）による交通秩序で結びつけ、さらにアクスから徴発したムスリム住民を通行幇助に専従するダバンチとしてムザルト峠に配備し、難所にオボーを造築して鎮風・鎮雪を祈願させた。ジューンガルにとってムザルト峠ルートは、貢納品・商税・人間などオアシス社会が生み出す富を吸い上げる、いわばストローの如き役割を果たしており、それによってジューンガルは国力の充実を図っていたのである。ムザルト峠をはじめとする天山越えの南北交通路は、天山以北における遊牧国家の形成と発展の歴史において、看過できない存在であったと結論した（「ムザルト峠を越えて：天山南北交通史序説」）。

第四に、本研究課題の遂行において基本史料の一つである『ハミード史』について、その序論の文献学的検討を試み、著者ムッラー・ムーサー・サイラーミーによる歴史の再構成（史書・口碑からの引用とその改変・配置・論評など）の特長を検討した（「ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探求：『ハミード史』序論の検討から」）。

以上の第一と第二は「２．研究の目的」に掲げた課題(2)に、第三は課題(3)に関連する成果である。課題(1)に関連する成果も、今後論文執筆の形で公表する予定である。また、本研究課題

に関連する成果の一部を英語と中国語として発信（論文・報告）することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Onuma Takahiro	４．巻 19
２．論文標題 Manchu Words Referring to the Qing Emperor: han and ejen	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Saksaha: A Journal of Manchu Studies	６．最初と最後の頁 63-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3998/saksaha.4214	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小沼孝博　（那日蘇訳）	４．巻 8
２．論文標題 清代乾隆朝扎哈沁之動態	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Oyirad Studies / 衛拉特研究	６．最初と最後の頁 8-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小沼孝博	４．巻 65/66合併号
２．論文標題 1795年におけるコーカンド使節と清の交渉：清代カシュガリアの政治・外交空間	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東北学院大学論集 歴史と文化	６．最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小沼孝博	４．巻 143
２．論文標題 ムザルト峠を越えて：天山南北交通史序説	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東方学	６．最初と最後の頁 61-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小沼孝博	4．巻 11
2．論文標題 タシュケント滞在記	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『アジア流域文化研究』	6．最初と最後の頁 76-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小沼孝博	4．巻 59
2．論文標題 清末ホヴド地区における清朝統治の再編とカザフ人	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東北学院大学論集 歴史と文化	6．最初と最後の頁 85-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Onuma Takahiro	4．巻 76
2．論文標題 The Shift in Qing-Kazakh Relations: The Qing Western Teritory in the 1770s	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko	6．最初と最後の頁 35-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小沼孝博（呉阿木古冷訳）	4．巻 11
2．論文標題 清朝統一準［口葛］爾及管轄制度設計	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中国辺疆民族研究	6．最初と最後の頁 210-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Onuma Takahiro	4．巻 1/2
2．論文標題 Dispatch of the Nusan Mission: The Negotiations between Qing and Ablay in 1757	5．発行年 2018年
3．雑誌名 GLOBAL-Turk	6．最初と最後の頁 55-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　8件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 小沼孝博
2．発表標題 1871年清朝与阿古柏伯克交渉始末
3．学会等名 中央研究院近代史研究所午餐分享会（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 小沼孝博
2．発表標題 満文中用以指代清朝皇帝的両個詞：han（汗）、ejen（厄真）
3．学会等名 中央研究院歴史語言研究所専題講座（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 小沼孝博
2．発表標題 乾隆四十二年的扎哈沁旗再編
3．学会等名 満文文献与清史研究国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 小沼孝博
２．発表標題 清朝の対中央アジア国書に関する基礎的研究：テュルク語文面とその作成者たち
３．学会等名 2022年度明清史夏合宿（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小沼孝博
２．発表標題 『清代回疆社会経済史研究』の出版とその意義
３．学会等名 日本中央アジア学会2021年度年次大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 小沼孝博
２．発表標題 回回館から回子官学へ：清朝宮廷におけるアラビア文字言語の訳員養成
３．学会等名 中国ムスリム研究会 20周年記念大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小沼孝博
２．発表標題 天山を越えて：ムザルト峠とその役割
３．学会等名 研究会「ユーラシア遊牧民の地図史」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小沼孝博
２．発表標題 清朝皇帝とejen号
３．学会等名 全球史視野下的歐亞大陸：第五屆清朝與内亞國際學術研討會／グローバルな視点でみるユーラシア大陸：第五回清朝と内陸アジア国際学術研究会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小沼孝博
２．発表標題 1871年阿古柏伯克与清朝交渉始末初探
３．学会等名 “清朝政治発展変遷研究”国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 小沼孝博
２．発表標題 2016年度天山北路踏査報告および豪州モリソン文書中の新疆関連史料について
３．学会等名 第54回 野尻湖クリルタイ［日本アルタイ学会］
４．発表年 2017年

１．発表者名 Onuma Takahiro
２．発表標題 Dispatch of the Nusan Mission: The Negotiations between Qing and Ablay in 1757
３．学会等名 17th Central Eurasian Studies Society Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

1．著者名 野田仁編、小沼孝博ほか共著	4．発行年 2023年
2．出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5．総ページ数 243
3．書名 近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照（小沼孝博「ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探求：『ハミード史』序論の検討から」pp.71-91）	

1．著者名 小松久男・野田 仁編、小沼孝博ほか共著	4．発行年 2019年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 320
3．書名 近代中央ユーラシアの眺望（小沼孝博「遊牧民とオアシスの民、そして交易：モグール・ウルスからジューンガルへ」pp.14-31）	

1．著者名 Onuma Takahiro, David Brophy, and Shinmen Yasushi eds.	4．発行年 2018年
2．出版社 The Toyo Bunko	5．総ページ数 284
3．書名 Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations (Toyo Bunko Research Library 18) (Onuma Takahiro, “Political Power and Caravan Merchants at the Oasis Towns in Central Asia: The Case of Altishahr in the 17th and 18th Centuries,” pp.33-57)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関